

大学院健康科学研究科健康科学専攻修士課程 カリキュラムマップ (2020年度入学生以降)

大学院研究科のディプロマポリシー					専攻のディプロマポリシー						
1. 修士課程健康科学研究科では、所定の年限を学し、研究指導を受け、所定の単位数を修得し、かつ本研究科が行う修士論文の審査及び試験に合格した者に修士の学位を授与する。 2. 修士課程修了にあつては、専攻のディプロマポリシーに到達していることを目安とする。					1. 健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している。 2. 社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を総合して、独創的で新しい視点を提起できる。 3. 研究領域に関連する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関連する知識に関心を持っている。 4. 人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている。 5. 自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる。						
専攻のカリキュラムポリシー					健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している						
<p>学問領域の構成</p> <p>健康増進に係る医療および健康科学分野の基礎的知識を涵養して、健康寿命の延伸に貢献するために必要な専門的知識や技能および態度を修得できるように学問領域を設定している。人の健康を阻害する要因である障害と生体機能の維持・回復・増進の支援する方策についての知識・技術を集積する「リハビリテーション学領域」、人の生涯にわたっての健康支援や健康を維持・増進するためのケアについての知識・技術を集積する「看護学領域」および両領域に共通する医学および健康科学に関連した領域である「専門基礎領域」から構成されている。</p> <p>科目編成</p> <p>専門とする研究領域とそれに関連する多様な科目はもちろんだが、他の研究領域や専門基礎領域の科目等を幅広く履修して、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させることを目的として、「基礎科目」「専門科目」および「課題研究科目」の3つの科目群で構成される。</p> <p>1. 基礎科目 (必修科目)</p> <p>本研究科の総論・導入として基礎的な科目群である健康生活を支援するために必要な基本的知識や健康決定要因など健康科学に関する知識について、「心身機能・身体構造」と「機能」について人の生活行動に深い「運動系」「神経系」を中心に学修する「健康科学特論Ⅰ」および「障害者」「高齢者」「家族」「健康増進」の視点から再構成し、「健康長寿」を追究するための基礎的知識を習得する「健康科学特論Ⅱ」を配置している。</p> <p>2. 専門科目</p> <p>(1) リハビリテーション学領域</p> <p>健康長寿社会に向けて運動や行動など身体活動を中心としたリハビリテーションの基盤となる知識や技術について「障害回復支援理学療法論」および「病態運動学論」から修得する。さらに医療の場が病院から在宅に移行していることに伴い、高い専門性と倫理観を背景とした在宅看護の質向上にむけた「在宅・家族看護学特論」などを配置している。</p> <p>(2) 看護学領域</p> <p>看護学の基盤として「看護理論」「看護倫理論」などを配置し、看護の本質を探究し看護実践への科学的なアプローチについて「実践看護基礎学特論」「実践看護技術学特論」で探求する。また、医療の場が病院から在宅に移行していることに伴い、高い専門性と倫理観を背景とした在宅看護の質向上にむけた「在宅・家族看護学特論」などを配置している。</p> <p>(3) 専門基礎領域</p> <p>リハビリテーション学領域と看護学領域の両領域に共通し、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させ、専門分野をより深く学修することを支援する科目を配置している。</p> <p>3. 課題研究科目</p> <p>「健康科学特別研究」を必修としている。ここでは、研究計画立案、調査あるいは実験計画の作成と実行、研究結果の分析と考察、そして論文執筆を通じて研究指導教員との議論を含む指導を受けながら、修士論文の完成に至る。その過程において、全ての研究科所属教員が参加する修士論文研究計画発表会にて、研究計画あるいは研究結果の報告発表を行う。多角的な視点から指導を受ける。</p>					<p>社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を総合して、独創的で新しい視点を提起できる</p> <p>研究領域に関連する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関連する知識に関心を持っている</p> <p>人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている</p> <p>自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる</p>						
科目区分	科目コード	科目名	授業科目の概要	到達目標	単位数		開講時期(●)				
					必修	選択	自由	春	秋	春	秋
基礎科目	5101	健康科学特論Ⅰ	健康生活を支援するために必要な健康決定要因など健康科学に関する知識の修得に当たり、「心身機能・身体構造」について人の生活行動に深い「運動系」「神経系」を中心に、基礎医学およびリハビリテーション学の視点から、健康の回復・維持・増進の支援に関する専門的知識を再構成し、「健康長寿」を追究するための基礎的知識を修得する。	1. ホメオスタシスと可塑性とその意義について説明できる。 2. 姿勢制御とその意義が説明できる。 3. 中枢神経系の機能と障害について説明できる。 4. ヒトの歩行とその意義について説明できる。	2				●		
	5102	健康科学特論Ⅱ	健康科学特論Ⅰに引き続き、「健康の定義」「障害者」「高齢者」「家族」「健康増進」「身体構造」の視点から健康科学について構築し、さらに健康の回復・維持・増進を支援する専門的知識を追求し、「健康長寿」を支援するための基礎的知識を修得する。	1. 健康とは何か定義づけ、解説できる。 2. 障害と健康との関係を解説できる。 3. 健康増進のための介入方法を理解し、説明できる。 4. 高齢者・障害者の健康問題と支援方法を解説できる。 5. 健康を維持するための身体の生体防御機構を機能形態学的に解説できる。	2				●		
リハビリテーション学領域	5105	障害回復支援理学療法論	現代医療におけるリハビリテーションと理学療法戦略の最新の動向を基に、理学療法における対象疾患の中心である運動器障害と神経系障害を中心に、これらの障害により生じる運動機能障害に対する治療・介入方法の歴史的考察、および最近の諸説と論点を理論的に統合し新たな実践体系を構築するための理論展開を図る。そのために障害者像・評価方法、各障害への取り組み方について再考しながら学修する。	1. 運動器疾患・神経系疾患の病態を理解し、治療とリハビリテーションの方針を立てることができる。 2. 運動器障害と中枢神経系障害の理学療法の評価方法と治療体系について最新の知見をもとに説明できる。 3. 高齢者の運動生理を理解し、障害回復のための理学療法の方針を立てることができる。	2				●		
	5106	病態運動学論	ヒトが日常生活を送る上で必要な各種動作を行うためには、各関節が協調的に機能することが重要となる。その中で筋は、関節運動における主要な役割を果たしていると同時に、関節への力学的ストレスを与えている。そのような関節への生体力学的作用を理解し、リハビリテーションを行う上で問題となる運動器障害の病態と、各種動作に及ぼす影響について学ぶ。また、その効果的な機能再建方法について学修する。	1. ヒトの起居動作を運動学・運動力学により説明できる。 2. スポーツにおける身体運動を運動学・運動力学により説明ができる。 3. 骨・関節・筋の力学特性を説明できる。 4. 身体運動による関節への力学的ストレスを説明できる。 5. 外傷による運動器障害の病態を説明できる。	2				●		
	5108	運動機能解析学特論	ヒトは、地球上で生活するからには重力から逃れることはできない。そのため、姿勢の保持や動作を行う場合には、重力に抗した身体活動が必要となる。その機能は、老化や各種疾患により低下し、日常生活に多くの問題を引き起こす。本講義では、三次元動作解析装置や筋電図を用いた運動機能の解析と、その結果に基づいて姿勢や動作能力の改善を計るためのリハビリテーション手法を先行研究から学修する。また、研究実施に向けた研究計画の立案と方法の選択を行う。	1. ヒトの歩行について説明できる。 2. 計ることの意味について説明できる。 3. 身体運動の計測手法について説明できる。 4. 研究目的と計画立案のために適切な資料を集めることができる。 5. 研究目的を設定し、それに適合した計測の実施ができる。 6. 計測結果を適切な方法で解析し、説明できる。 7. 研究報告書を作成し、その結果を発表できる。	4				●		
	5110	生体機能学特論	生体機能の科学的評価ならびにその評価に基づいた機能回復・維持・増進のための方策の計画・立案などに関する知識を学修する。特に、生活機能において主要な役割を果たしている骨格筋機能に焦点を当て、様々な刺激に対する応答から生活の質(QOL)および健康の維持増進に関連する先行研究を中心と比較検討し、総合的かつ専門的知識と技術を学修すると共に、研究実施に向けた研究計画の立案と方法の選択を行う。	1. 研究目的の設定ならびに研究計画の立案のために適切な資料を集めることができる。 2. 研究目的に適合した実験方法を選択し、その妥当性を説明できる。 3. 研究目的に適合した実験データの解析を選択し、その妥当性を説明できる。 4. 研究結果を発表し、その実験結果について議論できる。 5. 研究報告書を作成できる。	4				●		

大学院研究科のディプロマポリシー				専攻のディプロマポリシー										
<p>1. 修士課程健康科学研究科では、所定の年限で在学し、研究指導を受け、所定の単位数を修得し、かつ本研究科が行う修士論文の審査及び試験に合格した者に修士の学位を授与する。</p> <p>2. 修士課程修了にあつては、専攻のディプロマポリシーに到達していることを目安とする。</p>				<p>1. 健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している。</p> <p>2. 社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を抱合して、独創的で新しい視点を提起できる。</p> <p>3. 研究領域に関連する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関連する知識に関心を持っている。</p> <p>4. 人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている。</p> <p>5. 自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる。</p>										
<p>専攻のカリキュラムポリシー</p> <p>学問領域の構成 健康増進に係る医療および健康科学分野の基礎的知識を涵養して、健康寿命の延伸に貢献するために必要な専門的知識や技能および態度を修得できるように学問領域を設定している。人の健康を阻害する要因である障害と生体機能の維持・回復・増進の支援する方策についての知識・技術を集積する「リハビリテーション学領域」、人の生涯にわたっての健康支援や健康を維持・増進するためのケアについての知識・技術を集積する「看護学領域」および両領域に共通する医学および健康科学に関連した領域である「専門基礎領域」から構成されている。</p> <p>科目編成 専門とする研究領域とそれに関連する多様な科目はもちろ、他の研究領域や専門基礎領域の科目等を幅広く履修して、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させることを目的として、「基礎科目」「専門科目」および「課題研究科目」の3つの科目群で編成される。</p> <p>1. 基礎科目(必修科目) 本研究科の総論・導入として基礎的な科目群である健康生活を支援するために必要な基本的知識や健康決定要因など健康科学に関する知識について、「心身機能・身体構造」と「病態」について人の生活行動に関係の深い「運動系」「神経系」を中心に学修する「健康科学特論Ⅰ」および「障害者」「高齢者」「家族」「健康増進」の視点から再構成し、「健康長寿」を追究するための基礎的知識を習得する「健康科学特論Ⅱ」を配置している。</p> <p>2. 専門科目 (1) リハビリテーション学領域 健康長寿社会に向けて運動や行動など身体活動を中心としたリハビリテーションの基礎となる知識や技術について「障害回復支援理学療法論」および「病態運動学論」から修得する。さらに研究領域に関連する分野の最先端知識と研究手法を獲得し、新たな研究課題を探索するため運動機能解析学特論「生体機能学特論」「リハビリテーション神経科学特論」「身体運動制御学特論」を配置している。</p> <p>(2) 看護学領域 看護学の基礎として「看護理論」「看護倫理論」などを配置し、看護の本質を探究し看護実践への科学的なアプローチについて「実践看護基礎学特論」「実践看護技術学特論」で探求する。また、医療の場が病院から在宅に移行していることに伴い、高い専門性と倫理観を背景とした在宅看護の質向上にむけた「在宅・家族看護学特論」などを配置している。</p> <p>(3) 専門基礎領域 リハビリテーション学領域と看護学領域の両領域に共通し、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させ、専門分野をより深く学修することを支援する科目を配置している。</p> <p>3. 課題研究科目 「健康科学特別研究」を必修としている。ここでは、研究計画立案、調査あるいは実験計画の作成と実行、研究結果の分析と考察、そして論文執筆を通じて研究指導教員との議論を含む指導を受けながら、修士論文の完成に至る。その過程において、全ての研究科所属教員が参加する修士論文研究計画発表会にて、研究計画あるいは研究結果の発表機会をもち、多角的な視点から指導を受ける。</p>				<p>健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している</p> <p>社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を抱合して、独創的で新しい視点を提起できる</p> <p>研究領域に関連する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関連する知識に関心を持っている</p> <p>人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている</p> <p>自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる</p>										
科目区分	科目コード	科目名	授業科目の概要	到達目標	単位数		開講時期(●)							
					必修	選択	自由	1年	2年	春	秋	春	秋	
リハビリテーション学領域 専門科目	5113	生体構造学特論	私たちのからだの構造は、さまざまな構造があつて構成されている。その構造は表層から深層に向かって階層性として捉えられている。その中で、リハビリテーションとして扱われる密度の高い分野は運動器としての骨と筋ならびに神経系である。生体構造論特論では、骨と骨格筋と筋をコントロールしている神経系に焦点をあて、もの見方、そこから得られる問題点を探索すると共にヒトの見方を学ぶことによって得られる生体構造を探索する。生体構造の理論的観点から生体機能にまで幅広く考察する学び方を習得する。実際の研究活動を通して、生体構造・機能の基本的内容から発展的な内容および知識を探索する。関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実際、結果の吟味と考察および総合討論へと研究を展開している道筋を展開する。	1. 運動器(骨と筋)を多面的な見方及び考え方によって生体の規則性が説明できる。 2. 運動器(骨と筋)の構造と機能から神経科学へ応用する考えが説明できる。 3. 研究目的の設定及び研究計画の立案のために適切な資料を集めることができる。 4. 研究目的を設定し、その妥当性を説明でき、研究計画を立案し、その妥当性を説明できる。 5. 研究目的に適合した実験方法を選択し、その妥当性を説明できる。 6. 研究目的に適合した実験結果の収集法を選択し、その妥当性を説明できる。 7. 計画・立案を説明できる。 8. 研究報告書を作成できる。 9. 研究結果を発表し、その実験結果について議論できる。	4			●						
	5114	リハビリテーション神経科学特論	神経科学を基礎とした科学的根拠に基づくリハビリテーションの在り方を学び、当該分野における知識と思考力を身につける。特に、新しい学術情報に触れながら議論を深める。そのため、本授業において、まずは神経科学の基礎を学び、病態モデルを用いたリハビリテーション効果に関する研究に触れ、さらにはリハビリテーションの臨床への応用・展開する方向性を考える素養を身につけることを目的とする。	1. 神経科学分野における多くの論文を集め、読み解くことができる。 2. 神経科学分野の知見を元に、人々の健康増進やリハビリテーションの在り方を考察できる。 3. 研究目的と計画立案のための適切な資料を集めることができる。 4. 研究目的を設定し、それに適合した計測の実施ができる。 5. 計測結果を適切に解析し、説明できる。 6. 研究報告書を作成し、その結果を発表できる。	4			●						
	5115	身体運動制御学特論	運動障害を改善することは理学療法の重要な目的の一つである。ほとんどの場合、運動障害の背景には姿勢制御障害がある。つまり、運動障害を改善するには、その背景にある姿勢制御障害を改善する必要がある。本授業では、まずは健康なヒトにおいて運動時に姿勢がどのように制御されているのかを学ぶ。さらに、姿勢制御の研究がどのようになされるのかの方法論について実際に測定を行うことで理解する。そして、代表的な疾患で運動制御や姿勢制御がどのように障害されるかについて学習し、それに対してどのような理学療法を行うべきかについて議論する。その後、関連する文献研究を行いながら、研究実施に向けた研究計画の立案と方法の選択を行う。	1. 代表的な運動制御理論と姿勢制御理論について説明できる。 2. 正常なヒトにおける姿勢制御の特徴について説明できる。 3. 姿勢制御の研究の方法論を説明できる。 4. 代表的な疾患で運動制御と姿勢制御がどのように障害されるのかを説明でき、理学療法アプローチを考察することができる。 5. 研究目的と計画立案のために適切な資料を集めることができる。 6. 研究目的を設定し、それに適合した計測の実施ができる。 7. 計測結果を適切な方法で解析し説明できる。 8. 研究計画書を作成し、その結果を発表できる。	4			●						

大学院研究科のディプロマポリシー				専攻のディプロマポリシー											
1. 修士課程健康科学研究科では、所定の年限で在学し、研究指導を受け、所定の単位数を修得し、かつ本研究科が行う修士論文の審査及び試験に合格した者に修士の学位を授与する。 2. 修士課程修了にあつては、専攻のディプロマポリシーに到達していることを目安とする。				1. 健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している。 2. 社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を総合して、独自の新しい視点を提起できる。 3. 研究領域に関する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関する知識に関心を持っている。 4. 人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている。 5. 自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる。											
専攻のカリキュラムポリシー				健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している											
<p>学問領域の構成</p> <p>健康増進に係る医療および健康科学分野の基礎的知識を涵養して、健康寿命の延伸に貢献するために必要な専門的知識や技能および態度を修得できるように学問領域を設定している。人の健康を阻害する要因である障害と生体機能の維持・回復・増進の支援する方策についての知識・技術を集積する「リハビリテーション学領域」、人の生涯にわたっての健康支援や健康を維持・増進するためのケアについての知識・技術を集積する「看護学領域」および両領域に共通する医学および健康科学に関連した領域である「専門基礎領域」から構成されている。</p> <p>科目編成</p> <p>専門とする研究領域とそれに関連する多様な科目はもちろんだが、他の研究領域や専門基礎領域の科目等を幅広く履修して、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させることを目的としており、「基礎科目」「専門科目」および「課題研究科目」の3つの科目群で編成される。</p> <p>1. 基礎科目(必修科目)</p> <p>本研究科の総論・導入として基礎的な科目群である健康生活を支援するために必要な基本的知識や健康決定要因など健康科学に関する知識について、「心身機能・身体構造」と「病態」について人の生活行動に深く関係する「運動系」「神経系」を中心に学ぶ「健康科学特論Ⅰ」および「障害者」「高齢者」「家族」「健康増進」の視点から再構成し、「健康長寿」を追究するための基礎的知識を習得する「健康科学特論Ⅱ」を配置している。</p> <p>2. 専門科目</p> <p>(1) リハビリテーション学領域</p> <p>健康長寿社会に向けて運動や行動など身体活動を中心としたリハビリテーションの基礎となる知識や技術について「障害回復支援理学療法論」および「病態運動学論」から修得する。さらに研究領域に深く関係する分野の最先端知識と研究手法を獲得し、新たな研究課題を探索するため運動機能解析学特論「生体機能学特論」「リハビリテーション神経科学特論」「身体運動制御学特論」を配置している。</p> <p>(2) 看護学領域</p> <p>看護学の基礎として「看護理論」「看護倫理論」などを配置し、看護の本質を探究し看護実践への科学的アプローチについて「実践看護基礎学特論」「実践看護技術学特論」で探求する。また、医療の場が病院から在宅に移行していることに伴い、高い専門性と倫理観を背景とした在宅看護の質向上にむけた「在宅・家族看護学特論」などを配置している。</p> <p>(3) 専門基礎領域</p> <p>リハビリテーション学領域と看護学領域の両領域に共通し、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させ、専門分野をより深く学ぶことを支援する科目を配置している。</p> <p>3. 課題研究科目</p> <p>「健康科学特別研究」を必修としている。ここでは、研究計画立案、調査あるいは実験計画の作成と実行、研究結果の分析と考察、そして論文執筆を通じて研究指導教員との議論を含む指導を受けながら、修士論文の完成に至る。その過程において、全ての研究科所属教員が参加する修士論文研究計画発表会にて、研究計画あるいは研究結果の報告を行い、多角的な視点から指導を受ける。</p>				<p>社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を総合して、独自の新しい視点を提起できる</p> <p>研究領域に関する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関する知識に関心を持っている</p> <p>人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている</p> <p>自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる</p>											
科目区分	科目コード	科目名	授業科目の概要	到達目標	単位数		開講時期(●)								
					必修	選択	自由	春	秋	春	秋				
専攻科目 看護学領域	5126	在宅・家族看護学特論	家族人数の減少と急激な少子高齢化、病院から在宅医療への移行の促進に伴い、高い専門性と倫理観を背景とした在宅看護の質向上が期待されている。在宅・家族看護学特論では、地域の中で療養している人と家族を包括的に捉え、安定した日常生活の維持に向けた在宅看護の役割と機能について学ぶとともに、在宅・家族看護学分野をふまえた基本的な研究手法を修得する。	在宅・家族看護学特論の到達目標は、在宅看護学と家族看護学に関する理論やモデル等について学び、それら知識を用いて現象を説明できることである。また、在宅看護学、家族看護学に関連した事例の検討により、対象の特徴と支援のあり方について深く検討するとともに、文献クリティカルにより、それらの分野における研究課題、研究方法について学び、在宅・家族看護学分野の研究を実施する基礎的能力を獲得する。	4				●			◎	◎	○	○
	5127	実践看護基礎学特論	看護学全体の内容的な構造を検討した上で実践基礎看護学の意義、位置づけを考察する。また、看護の本質と目的、対象、看護技術、実践への手だてに関する研究結果を理論的および時代のトピックス性の観点から検討する。さらに、これらの領域において課題となっている事象に対し、取り組む研究方法についても考察する。	1. 看護学全体の内容的な構造と全体の構造をとらえ、実践をふまえた看護学の位置づけを理解する。 2. 質の高い看護実践をめざす看護の本質、概念について、理論家の多様な主張を含め、多角的な見地から検討し理解する。 3. 看護の対象についてのとらえ方、見方について、研究成果を含む多様な見地から検討し理解する。 4. 看護実践の方法論として、看護技術の意義、概念、構造等について、研究成果を含む多様な見地から検討し理解する。 5. 理論的な看護実践の力法論として、看護過程、アセスメント、看護診断、介入、成果等の実践への活用について吟味を加えたレポート制作。 6. 看護学の基礎となり、かつ時宜を得た研究課題、特徴的な研究方法について具体的に検討し考察する。	4				●			◎	◎	○	○
	512A	実践看護技術学特論	看護実践場面における看護行為を取り上げ、その行為を成り立たせている看護技術の原理・原則との関係性と看護技術の可能性を多面的に検討し、新たな看護技術の有効性を検証する方法について学ぶ。主に、「身体機能を支援するケア」、「フィジカルアセスメント」、「看護コミュニケーション」に関する看護技術を重点的に取り組む。	1. 看護実践場面における看護行為と看護技術の原理・原則との関係を構造化し、看護技術がもつ意味を理解する。 2. 看護技術の開発において、重視しなければならない看護の視点について検討する。 3. 看護技術に必要な計測・測定技術の有効性および具体的な活用方法について、多面的に検討し、看護技術開発の有効性を検証する。	4				●			◎	◎	○	○
	5128	看護倫理論	看護倫理の意義とその必要性について哲学的、理論的、社会的な見地から考察でき、「倫理」の概念、本質、原則、倫理的なジレンマについて理解する。同時に、生命倫理の歴史的な背景、変遷と現在の社会的な要請の見地等についても理解する。また、医療および看護場面における倫理的ジレンマについて多様な観点から考察し、看護実践に活用出来るモチベーションを高めると共に、その専門領域に関する具体的な倫理的ジレンマについて、倫理的な調整等、解決策を含めた考察を深める。さらに看護倫理に対する研究的な課題とアプローチおよび看護倫理に関する組織的な取り組みについても理解する。	1. 看護倫理の意義とその必要性について理論的、社会的な見地から考察できる。 2. 伝統的倫理学と近代的倫理学の概括から理論的基盤に基づき、倫理の「倫理」の概念、原則、倫理的なジレンマについて理解する。 3. 生命倫理の考え方の歴史的な背景、変遷と現在の社会的な要請の見地から、そのあり様を理解する。 4. 看護倫理の概念、本質、哲学的な基盤、意義について理解する。 5. 看護倫理を実践していく上で必要なコンピテンシー、方法について理解出来る。 6. 医療および看護場面における倫理的ジレンマについて多様な観点から考察し、看護実践に活用出来るモチベーションを高める。専門看護師をめざすのには、その倫理の重要性を認識し、その倫理を践むことについて理解する。 7. 看護倫理に対する研究的な課題とアプローチ、看護倫理に関する組織的な取り組みについて理解する。	2				●			◎	◎	○	○

大学院研究科のディプロマポリシー				専攻のディプロマポリシー															
1. 修士課程健康科学研究科では、所定の年限で在学し、研究指導を受け、所定の単位数を修得し、かつ本研究科が行う修士論文の審査及び試験に合格した者に修士の学位を授与する。 2. 修士課程修了にあつては、専攻のディプロマポリシーに到達していることを目安とする。				1. 健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している。 2. 社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を総合して、独自の新しい視点を提起できる。 3. 研究領域に関する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関する知識に関心を持っている。 4. 人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている。 5. 自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる。															
専攻のカリキュラムポリシー																			
<p>学問領域の構成</p> <p>健康増進に係る医療および健康科学分野の基礎的知識を涵養し、健康寿命の延伸に貢献するために必要な専門的知識や技能および態度を修得できるように学問領域を設定している。人の健康を阻害する要因である障害と生体機能の維持・回復・増進の支援する方策についての知識・技術を集積する「リハビリテーション学領域」、人の生涯にわたっての健康支援や健康を維持・増進するためのケアについての知識・技術を集積する「看護学領域」および両領域に共通する医学および健康科学に関連した領域である「専門基礎領域」から構成されている。</p> <p>科目編成</p> <p>専門とする研究領域とそれに関連する多様な科目はもちろむ、他の研究領域や専門基礎領域の科目等を幅広く履修して、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させることを目的として、「基礎科目」「専門科目」および「課題研究科目」の3つの科目群で編成される。</p> <p>1. 基礎科目(必修科目)</p> <p>本研究科の総論・導入として基礎的な科目群である健康生活を支援するために必要な基本的知識や健康決定要因など健康科学に関する知識について、「心身機能・身体構造」と「病態」について人の生活行動に深く関係する「運動系」「神経系」を中心に学修する「健康科学特論Ⅰ」および「障害者」「高齢者」「家族」「健康増進」の視点から再構成し、「健康長寿」を追究するための基礎的知識を習得する「健康科学特論Ⅱ」を配置している。</p> <p>2. 専門科目</p> <p>(1) リハビリテーション学領域</p> <p>健康長寿社会に向けて運動や行動など身体活動を中心としたリハビリテーションの基礎となる知識や技術について「障害回復支援理学療法論」および「病態運動学論」から修得する。さらに研究領域に関する分野の最先端知識と研究手法を獲得し、新たな研究課題を探索するため運動機能解析学特論「生体機能学特論」「リハビリテーション神経科学特論」「身体運動制御学特論」を配置している。</p> <p>(2) 看護学領域</p> <p>看護学の基礎として「看護理論」「看護倫理論」などを配置し、看護の本質を探究し看護実践への科学的アプローチについて「実践看護基礎学特論」「実践看護技術学特論」で探求する。また、医療の場が病院から在宅に移行していることに伴い、高い専門性と倫理観を背景とした在宅看護の質向上にむけた「在宅・家族看護学特論」などを配置している。</p> <p>(3) 専門基礎領域</p> <p>リハビリテーション学領域と看護学領域の両領域に共通し、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させ、専門分野をより深く学修することを支援する科目を配置している。</p> <p>3. 課題研究科目</p> <p>「健康科学特別研究」を必修としている。ここでは、研究計画立案、調査あるいは実験計画の作成と実行、研究結果の分析と考察、そして論文執筆を通じて研究指導教員との議論を含む指導を受けながら、修士論文の完成に至る。その過程において、全ての研究科所属教員が参加する修士論文研究計画発表会にて、研究計画あるいは研究結果の報告や発表を通じて、多角的な視点から指導を受ける。</p>				<p>健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している</p> <p>社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を総合して、独自の新しい視点を提起できる</p> <p>研究領域に関する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関する知識に関心を持っている</p> <p>人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている</p> <p>自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる</p>															
科目区分	科目コード	科目名	授業科目の概要	到達目標	単位数		開講時期(●)												
					必修	選択	自由	春	秋	春							秋		
看護学領域	5129	看護理論	看護理論および周辺諸理論を体系的に理解し看護実践への活用をめざす。この活用に向けて、看護理論を体系的に概観し、諸理論の変遷と内容的構造及び特徴を理解する。主要な看護理論家の看護モデルについて、その哲学的基盤、概念及び看護の実践/教育/研究への活用について理解する。	1. 看護理論を体系的に概観し、諸理論の変遷と内容的構造及び特徴を理解する。 2. 主要な看護理論家の看護モデルについて、その哲学的基盤、概念及び看護の実践/教育/研究への活用について理解する。 3. 広範囲理論であるロイ適応モデルの理論構築、重要概念及び看護の実践/教育/研究への適用における具体的な活用について理解する。 4. 日頃関心のある領域において、その看護理論及び諸理論の概括を理解したうえで適用の妥当性を考察し、実践/教育/研究への具体的な活用について探求する。	2				●					◎					
	512B	周術期看護管理論	侵襲性の高い治療である外科手術における患者の生体反応を理解し、患者の生活の質(QOL)を支える周術期管理の方策に関する専門的知識を学修する。特に高齢者などのハイリスクな患者に対して、他の医療専門職と協働して問題解決を行う看護師の役割を考察し、周術期における看護援助を学修する。	1. 手術侵襲を受ける対象者の生体反応を理解できる。 2. 手術を受ける患者の身体・心理・社会的側面をアセスメントし、侵襲を最小限にする看護援助を理解することができる。 3. 主要な外科疾患の病態生理を理解し、その最新の外科治療法における看護ができる。 4. 主要な外科治療法の術前・術中・術後の看護と患者管理を説明できる。 5. 周術期における看護を探求することができる。	2					●			◎					◎	
	512C	がん医療社会学論	がん医療にかかわる問題を社会システムとして捉えることで、がん患者支援のあるべき姿を探求することを目指す。がんは身体的な苦痛を与えるのみならず、精神・社会・実存的苦痛を与えることはトータルペインに称されるように知られていることである。そのがん患者を支える支援の枠組みを、社会学(政策含む)・看護学・医学等の学際的なフィールドワークから探求することで新たな知見を創出していく。すなわち、がんを社会学のシステムという観点から患者支援の枠組みを構築していくことがねらいである。	1. 研究に必要な文献を収集し、その文献を検討することができる。 2. がん患者に必要な支援の在り方を、医療社会学の観点から説明することができる。 3. 研究テーマを自ら設定し、その課題を明らかにする手法および分析方法を選択することができる。 4. 研究レポートを作成し、発表することができる。	2							●		◎					◎
	512D	老年看護援助論	老年期の発達課題や加齢に伴う身体・心理・社会面の変化、高齢者とその家族を理解するための諸理論およびサポートシステムの動向について学び、高齢者の特性に応じた看護実践について理解を深める。また、老年看護に関する研究の動向から、老年看護実践における課題を検討する。	1. 老年看護に関する主要な概念や理論を理解し、実践への活用について自己の考えを述べることができる。 2. 高齢者とその家族を支えるサポートシステムの現状と課題を説明できる。 3. 老年看護に関する研究の動向を整理し、老年看護実践における課題を述べることができる。	2							●		◎					◎
専門基礎領域	5131	適応生理学論	生体諸機能は、種々の刺激(ストレス)を受容し、それに応答・適応する。さらに、発育・発達・成熟・老化や様々な疾病・疾患により生体の機能は大きく変容する。本講義では、生活の質(Quality of Life)や健康の維持増進において主要な臓器である骨格筋を対象に、様々な刺激(ストレス)に対する生体応答と適応機構に関する知識および予防医学から運動、疲労、休養など多角的な視点から健康を取り巻く総合的な知識を修得する。	1. 細胞外刺激とその応答について、細胞内シグナル伝達から説明できる。 2. 骨格筋、骨、心筋細胞、消化吸収機能の適応について説明できる。 3. 骨格筋の可塑性とその仕組みを説明できる。 4. 種々の環境に対する生体機能の適応を説明できる。 5. 老化に伴う生体機能の変化を説明できる。	2							●		◎					◎



大学院研究科のディプロマポリシー				専攻のディプロマポリシー										
1. 修士課程健康科学研究科では、所定の年限で学し、研究指導を受け、所定の単位数を修得し、かつ本研究科が行う修士論文の審査及び試験に合格した者に修士の学位を授与する。 2. 修士課程修了にあつては、専攻のディプロマポリシーに到達していることを目安とする。				1. 健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している。 2. 社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を総合して、独自の新しい視点を提起できる。 3. 研究領域に関する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関する知識に関心を持っている。 4. 人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている。 5. 自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる。										
専攻のカリキュラムポリシー				健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している										
<p>学問領域の構成</p> <p>健康増進に係る医療および健康科学分野の基礎的知識を涵養し、健康寿命の延伸に貢献するために必要な専門的知識や技能および態度を修得できるように学問領域を設定している。人の健康を阻害する要因である障害と生体機能の維持・回復・増進の支援する方策についての知識・技術を集積する「リハビリテーション学領域」、人の生涯にわたっての健康支援や健康を維持・増進するためのケアについての知識・技術を集積する「看護学領域」および両領域に共通する医学および健康科学に関連した領域である「専門基礎領域」から構成されている。</p> <p>科目編成</p> <p>専門とする研究領域とそれに関連する多様な科目はもちろんで、他の研究領域や専門基礎領域の科目等を幅広く履修して、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させることを目的としており、「基礎科目」「専門科目」および「課題研究科目」の3つの科目群で編成される。</p> <p>1. 基礎科目(必修科目)</p> <p>本研究科の総論・導入として基礎的な科目群である健康生活を支援するために必要な基本的知識や健康決定要因など健康科学に関する知識について、「心身機能・身体構造」と「病態」について人の生活行動に関係の深い「運動系」「神経系」を中心に学修する「健康科学特論Ⅰ」および「障害者」「高齢者」「家族」「健康増進」の視点から再構成し、「健康長寿」を追究するための基礎的知識を習得する「健康科学特論Ⅱ」を配置している。</p> <p>2. 専門科目</p> <p>(1) リハビリテーション学領域</p> <p>健康長寿社会に向けて運動や行動など身体活動を中心としたリハビリテーションの基礎となる知識や技術について「障害回復支援理学療法論」および「病態運動学論」から修得する。さらに研究領域に属する分野の最先端知識と研究手法を履修し、新たな研究課題を探索するため運動機能解析学特論「生体機能学特論」「リハビリテーション神経科学特論」「身体運動制御学特論」を配置している。</p> <p>(2) 看護学領域</p> <p>看護学の基礎として「看護理論」「看護倫理論」などを履修し、看護の本質を探究し看護実践への科学的アプローチについて「実践看護基礎学特論」「実践看護技術学特論」で探求する。また、医療の場が病院から在宅に移行していることに伴い、高い専門性と倫理観を背景とした在宅看護の質向上にむけた「在宅・家族看護学特論」などを配置している。</p> <p>(3) 専門基礎領域</p> <p>リハビリテーション学領域と看護学領域の両領域に共通し、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させ、専門分野をより深く学修することを支援する科目を配置している。</p> <p>3. 課題研究科目</p> <p>「健康科学特別研究」を必修としている。ここでは、研究計画立案、調査あるいは実験計画の作成と実行、研究結果の分析と考察、そして論文執筆を通じて研究指導教員との議論を含む指導を受けながら、修士論文の完成に至る。その過程において、全ての研究科所属教員が参加する修士論文研究計画発表会にて、研究計画あるいは研究結果の報告や発表を通して、多角的な視点から指導を受ける。</p>				<p>社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を総合して、独自の新しい視点を提起できる</p> <p>研究領域に関する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関する知識に関心を持っている</p> <p>人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている</p> <p>自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる</p>										
科目区分	科目コード	科目名	授業科目の概要	到達目標	単位数	開講時期(●)				1年		2年		
					必修	選択	自由	春	秋	春	秋	春	秋	
専門基礎領域	5135	対人コミュニケーション論	私たち人間は、他のモノから同種の仲間であるヒトを峻別し、ヒトならではのコミュニケーションを行う。その過程には、視線、顔、音調などの非言語的情報だけでなく、音声言語・文字などの言語的情報によるものなど、さまざまな様式の情報処理過程を含む。その発達と障害・病態およびその脳内処理過程について、最新の知見も踏まえて講義するとともに、社会の人々の精神的健康を支援・増進するという立場から、現代社会における対人コミュニケーションの重要性と問題点について検討を行う。	1. コミュニケーションの構成要素を説明できる。 2. 対人間でやりとりされる情報を列挙できる。 3. 対人間でやりとりされる情報の発信と解釈に関する発達、性差、年齢差、文化差等について、説明できる。 4. 対人コミュニケーションにかかわる障害およびその脳内過程について説明できる。 5. コミュニケーションそのものに関する問題とコミュニケーションを通して介入できる問題とを区別できる。 6. 対人コミュニケーションに関して発生しやすい具体的な事例に対して、解決に向けて介入するための何らかの提案ができる。	2						●			
	5138	コンサルテーション論	いかに専門家の援助であっても、そこに「援助関係」を構築することができなければ、援助を受ける人は援助に「腹を立てたり、無視したりする」(E.H. シャイン, 2012)ことになる。援助することには哲学が必要であり、技術が必要である。本科目では、自らの専門に関する知識と技術を提供する際に必須の「援助関係」について、コンサルテーションの視点から具体的に考察し、検討する。これにより、高度医療専門職として相談、調整、指導、倫理の機能を果たす基礎を養う。	1. コンサルテーションの基本概念、もてらについて述べるができる。 2. コンサルテーションのプロセス、活動の方法を踏まえたコンサルタントとしての基本的な態度について述べるができる。 3. 個人、グループ、組織へのコンサルテーションの展開方法について、事例を分析できる。	2						●			
	5139	老年期地域健康支援論	地域包括ケアシステムの構築が進む中、老年期の健康支援および健康寿命の延伸は必須の課題である。本授業では、高齢者を対象とした健康づくりや自立生活を旨とする医療関連職としての素養を育てることを目的とする。その取り組みとして、まずは老年期地域生活者の健康に関する実態を知り、介入手段の例について学ぶ。さらには、多職種連携を念頭に置いた具体的な事例検討を通じてその理解を深める。	1. 老年期の健康問題を整理し、説明することができる。 2. 老年期の健康維持増進について具体的な方策を説明することができる。 3. 多職種連携・協働の意義を認識し各専門職の立場で議論ができる。 4. これからの地域健康支援について考察し説明することができる。	2						●			
	913C	神経科学健康論	人々の健康問題を神経科学の視点で見直し、予防やリハビリテーションが貢献する可能性について考える機会とする。本授業では、脳卒中をはじめとした中枢神経障害に加え、認知症や抑うつなどの精神障害にも着目し、現代のストレス社会を生きている我々の健康問題について再考する機会とする。特に、神経科学の目覚ましい進歩をベースに健康論を展開することにより、科学的根拠に基づく思考ができるようになることを目的とする。	1. 脳の働きと、運動、食事、睡眠、ストレスなどの関係を説明できる。 2. 脳血管障害など脳損傷の病態とその回復に関する知見を持つ。 3. 抑うつを病態生理学的に理解し、その改善策を模索できる。 4. 自律神経機能、疼痛、生体リズムなどについて理解を深める。	2						●			
	913D	身体運動解析論	ヒトの身体運動を分析することは、運動障害を扱う理学療法士にとって重要な臨床過程の一つである。近年の計測機器や計測手法の進歩とともに、身体運動を詳細に計測・分析することが可能となっている。また、計測結果を客観的かつ詳細に、また迅速に解析するには、プログラミングや統計解析の知識も必要になる。そこで、本授業では、まず身体運動の計測法と解析法を実際の測定と解析を行いながら学ぶ。次に身体運動の解析でよく用いられるMatlabのプログラミングの基礎を学ぶ。最後に分析結果を統計的に処理する際の注意点を学ぶことで、身体運動	1. 身体運動解析の基礎事項について説明できる。 2. 身体運動の測定機器の特性や計測原理、測定における注意点を説明できる。 3. 身体運動の測定項目に応じた解析方法を説明し、実践できる。 4. プログラミングを用いて基本的な解析を行える。 5. データの解釈に対し適切な統計手法を選択することができる。	2						●			

大学院研究科のディプロマポリシー					専攻のディプロマポリシー															
1. 修士課程健康科学研究科では、所定の年限で在学し、研究指導を受け、所定の単位数を修得し、かつ本研究科が行う修士論文の審査及び試験に合格した者に修士の学位を授与する。 2. 修士課程修了にあつては、専攻のディプロマポリシーに到達していることを目安とする。					1. 健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している。 2. 社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を総合して、独自の新しい視点を提起できる。 3. 研究領域に関する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関する知識に関心を持っている。 4. 人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている。 5. 自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる。															
<b>専攻のカリキュラムポリシー</b>  <b>学問領域の構成</b> 健康増進に係る医療および健康科学分野の基礎的知識を涵養し、健康寿命の延伸に貢献するために必要な専門的知識や技能および態度を修得できるように学問領域を設定している。人の健康を阻害する要因である障害と生体機能の維持・回復・増進の支援する方策についての知識・技術を集積する「リハビリテーション学領域」、人の生涯にわたっての健康支援や健康を維持・増進するためのケアについての知識・技術を集積する「看護学領域」および両領域に共通する医学および健康科学に関連した領域である「専門基礎領域」から構成されている。																				
<b>科目編成</b> 専門とする研究領域とそれに関連する多様な科目はもちろんで、他の研究領域や専門基礎領域の科目等を幅広く履修して、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させることを目的として、「基礎科目」「専門科目」および「課題研究科目」の3つの科目群で編成される。 1. 基礎科目(必修科目) 本研究科の総論・導入として基礎的な科目群である健康生活を支援するために必要な基本的知識や健康決定要因など健康科学に関する知識について、「心身機能・身体構造」と「病態」について人の生活行動に深い「運動系」「神経系」を中心に学ぶ「健康科学特論Ⅰ」および「障害者」「高齢者」「家族」「健康増進」の視点から再構成し、「健康長寿」を追究するための基礎的知識を習得する「健康科学特論Ⅱ」を配置している。 2. 専門科目 (1) リハビリテーション学領域 健康長寿社会に向けて運動や行動など身体活動を中心としたリハビリテーションの基礎となる知識や技術について「障害回復支援理学療法論」および「病態運動学論」から修得する。さらに研究領域に属する分野の最先端知識と研究手法を習得し、新たな研究課題を探索するための運動機能解析学特論「生体機能学特論」「リハビリテーション神経科学特論」「身体運動制御学特論」を配置している。 (2) 看護学領域 看護学の基礎として「看護理論」「看護倫理論」などを配置し、看護の本質を探究し看護実践への科学的アプローチについて「実践看護基礎学特論」「実践看護技術学特論」で探求する。また、医療の場が病院から在宅に移行していることに伴い、高い専門性と倫理観を背景とした在宅看護の質向上にむけた「在宅・家族看護学特論」などを配置している。 (3) 専門基礎領域 リハビリテーション学領域と看護学領域の両領域に共通し、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させ、専門分野をより深く学修することを支援する科目を配置している。 3. 課題研究科目 「健康科学特別研究Ⅰ」を必修としている。ここでは、研究計画立案、調査あるいは実験計画の作成と実行、研究結果の分析と考察、そして論文執筆を通じて研究指導教員との議論を含む指導を受けながら、修士論文の完成に至る。その過程において、全ての研究科所属教員が参加する修士論文研究計画発表会にて、研究計画あるいは研究結果の報告や発表を通して、多角的な視点から指導を受ける。																				
科目区分	科目コード	科目名	授業科目の概要	到達目標	単位数		開講時期(●)													
					必修	選択	自由	春	秋	春	秋									
専門基礎領域	513F	ストレスマネジメント論	ストレスマネジメントに関する理論的背景および現在の保健医療領域におけるストレスマネジメントの状況、専門職としての取り組みについての知識を修得する。	1. ストレスマネジメントに関する基本的概念、理論について述べることができる。 2. ストレスマネジメントの方法について述べることができる。 3. 医療専門職者自身のストレスマネジメントの対策と方法について述べることができる。 4. 現在の保健医療領域におけるストレスマネジメントの状況について、地震の専門分野に関連した状況について述べることができる。	2				●											
課題研究科目	5141	健康科学特別研究Ⅰ	1. 研究テーマ候補を選択し、関連する先行研究を収集できる。 2. 適切な研究目的の設定と方法の選択ができる。 3. 研究を実施できる。 4. 結果の吟味と考察できる。 5. 修士論文を作成できる。 6. 研究成果を発表し、討論できる。	1. 研究テーマ候補を選択し、関連する先行研究を収集できる。 2. 適切な研究目的の設定と方法の選択ができる。 3. 研究を実施できる。 4. 結果の吟味と考察できる。 5. 修士論文を作成できる。 6. 研究成果を発表し、討論できる。	2					●					○					
	5141	健康科学特別研究Ⅰ	1. 関連する先行研究をまとめることができる。 2. 適切な研究目的が設定できる。 3. 目的に合った研究方法を選択するための予備的な実験を実施できる。	1. 関連する先行研究をまとめることができる。 2. 適切な研究目的が設定できる。 3. 目的に合った研究方法を選択するための予備的な実験を実施できる。	2					●					○					
	5141	健康科学特別研究Ⅰ	この健康科学特別研究Ⅰ～Ⅲでは、看護の目的・本質や倫理、看護アセスメントと看護診断、看護方法等、実践看護学の基礎となる内容に関して、研究的な視点から捉え、研究として取り組む全プロセスの学修を目指す科目である。健康科学特別研究Ⅰでは、あらゆる看護の対象者および看護実践場面に共通し、基礎となる現象を概念として捉えて研究的視点から探求するために、看護学における研究の視点及び文献探求を含む研究方法の特徴について学修を深める。そのうえで、自己の経験に基づく看護の現象、場面から研究テーマを見出す。また、関心あるテーマについて文献検討をもとに分析し、その現状や課題を研究取り組み意義を整理する。 4. 自己の関心あるテーマについて文献検討をもとに分析し、その現状や課題を研究取り組み意義を整理する。 5. 自己の研究課題に基づき、この課題を明確にしていくための研究方法を検討する。 6. 自己の研究計画書を作成できる。	1. 看護の目的・本質や倫理、看護アセスメントと看護診断、看護方法等、実践看護学の基礎となる内容に関して、研究的な視点から捉え、研究として取り組む全プロセスの学修を目指す科目である。健康科学特別研究Ⅰでは、あらゆる看護の対象者および看護実践場面に共通し、基礎となる現象を概念として捉えて研究的視点から探求するために、看護学における研究の視点及び文献探求を含む研究方法の特徴について学修を深める。そのうえで、自己の経験に基づく看護の現象、場面から研究テーマを見出す。また、関心あるテーマについて文献検討をもとに分析し、その現状や課題を研究取り組み意義を整理する。 4. 自己の関心あるテーマについて文献検討をもとに分析し、その現状や課題を研究取り組み意義を整理する。 5. 自己の研究課題に基づき、この課題を明確にしていくための研究方法を検討する。 6. 自己の研究計画書を作成できる。	2					●				○						

大学院研究科のディプロマポリシー					専攻のディプロマポリシー															
1. 修士課程健康科学研究科では、所定の年限で学し、研究指導を受け、所定の単位数を修得し、かつ本研究科が行う修士論文の審査及び試験に合格した者に修士の学位を授与する。 2. 修士課程修了にあつては、専攻のディプロマポリシーに到達していることを目安とする。					1. 健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している。 2. 社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を総合して、独自の新しい視点を提起できる。 3. 研究領域に関する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関する知識に関心を持っている。 4. 人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている。 5. 自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる。															
専攻のカリキュラムポリシー																				
<p>学問領域の構成</p> <p>健康増進に係る医療および健康科学分野の基礎的知識を涵養し、健康寿命の延伸に貢献するために必要な専門的知識や技能および態度を修得できるように学問領域を設定している。人の健康を阻害する要因である障害と生体機能の維持・回復・増進の支援する方策についての知識・技術を集積する「リハビリテーション学領域」、人の生涯にわたっての健康支援や健康を維持・増進するためのケアについての知識・技術を集積する「看護学領域」および両領域に共通する医学および健康科学に関連した領域である「専門基礎領域」から構成されている。</p> <p>科目編成</p> <p>専門とする研究領域とそれに関連する多様な科目はもちろ、他の研究領域や専門基礎領域の科目等を幅広く履修して、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させることを目的として、「基礎科目」「専門科目」および「課題研究科目」の3つの科目群で編成される。</p> <p>1. 基礎科目(必修科目)</p> <p>本研究科の総論・導入として基礎的な科目群である健康生活を支援するために必要な基本的知識や健康決定要因など健康科学に関する知識について、「心身機能・身体構造」と「病態」について人の生活行動に深い「運動系」「神経系」を中心に学修する「健康科学特論Ⅰ」および「障害者」「高齢者」「家族」「健康増進」の視点から再構成し、「健康長寿」を追究するための基礎的知識を習得する「健康科学特論Ⅱ」を配置している。</p> <p>2. 専門科目</p> <p>(1) リハビリテーション学領域</p> <p>健康長寿社会に向けて運動や行動など身体活動を中心としたリハビリテーションの基礎となる知識や技術について「障害回復支援理学療法論」および「病態運動学論」から修得する。さらに研究領域に属する分野の最先端知識と研究手法を習得し、新たな研究課題を探索するため運動機能解析学特論「生体機能学特論」「リハビリテーション神経科学特論」「身体運動制御学特論」を配置している。</p> <p>(2) 看護学領域</p> <p>看護学の基盤として「看護理論」「看護倫理論」などを配置し、看護の本質を探究し看護実践への科学的アプローチについて「実践看護基礎学特論」「実践看護技術学特論」で探求する。また、医療の場が病院から在宅に移行していることに伴い、高い専門性と倫理観を背景とした在宅看護の質向上にむけた「在宅・家族看護学特論」などを配置している。</p> <p>(3) 専門基礎領域</p> <p>リハビリテーション学領域と看護学領域の両領域に共通し、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させ、専門分野をより深く学修することを支援する科目を配置している。</p> <p>3. 課題研究科目</p> <p>「健康科学特別研究」を必修としている。ここでは、研究計画立案、調査あるいは実験計画の作成と実行、研究結果の分析と考察、そして論文執筆を通じて研究指導教員との議論を含む指導を受けながら、修士論文の完成に至る。その過程において、全ての研究科所属教員が参加する修士論文研究計画発表会にて、研究計画あるいは研究結果の報告発表を通じて、多角的な視点から指導を受ける。</p>					<p>健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している</p> <p>社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を総合して、独自の新しい視点を提起できる</p> <p>研究領域に関する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関する知識に関心を持っている</p> <p>人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている</p> <p>自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる</p>															
科目区分	科目コード	科目名	授業科目の概要	到達目標	単位数	開講時期(●)				◎	○	○	◎	◎						
						1年	2年	春	秋											
					必修	選択	自由													
課題研究科目	5141	健康科学特別研究Ⅰ	理学療法(PT)学研究における多様な研究方法の特徴について理解し、PT学の本質と目的、対象論、実践への方法論を検討し、院生自身のもつ問題意識を明確にする。文献等の十分な検討の後、研究の意義をふまえたうえで、その事象の課題解決に合った研究計画を立案する。一連の過程において、研究の倫理的重要性と、研究のプロセスについての重要性の学びを同時に修得する。	1. PT学研究における多様な研究方法の特徴について理解できる。 2. PTの本質と目的、対象論、実践への方法論の見地から、院生自身のもつ問題意識を明確にできる。 3. 院生自身のもつ問題意識に関連した文献の検討が、多様な視点からできる。 4. PT学研究における多様な研究方法の特徴について理解できる。 5. 院生自身のもつ問題意識に基づいて、研究の概念枠組み、研究テーマの決定ができる。 6. 研究課題にそって、研究の意義を念頭に研究目的が設定できる。 7. 研究計画を立案できる。 (1) 研究デザインを構築できる (2) 研究目的に適合した対象の設定ができる (3) 研究手法を立案、構築できる	2					●			◎	○	○	◎	◎			
	5141	健康科学特別研究Ⅰ	初等統計学よりも一歩進んだ標準的な教科書を通読する。	医学論文に出てくる統計手法の概略を理解できるようになり、自身でも利用できるようになる。	2					●			◎	○	○	◎	◎			
	5141	健康科学特別研究Ⅰ	目的: 臨地(研究者が研究臨地として設定した)対象における健康と生活の質(QOL)の向上に寄与 目標: ヘルスプロモーション施策 下記の要素を取り入れた研究による貢献 1. 公共政策 2. 環境づくり 3. 健康向上への実践的活動強化 4. 技術開発 5. 一次予防への開発支援	研究におけるバックグラウンドの学習と研究課題を明確化する。	2					●			◎	○	○	◎	◎			
	5141	健康科学特別研究Ⅰ	家族人数の減少と急速な少子高齢化、病院から在宅医療への移行の促進に伴い、高い専門性と倫理観を背景とした在宅看護の質向上が期待されている。健康科学特別研究Ⅰ～Ⅲでは、在宅看護学の学問を用いて、在宅看護の質向上と対象者のQOL向上につながる研究課題を見出し、研究計画に基づき、研究手法を用いて論文としてまとめる学術的な取り組みについて学修する。	自己の研究課題に関わる在宅看護学分野における最新の知見と研究方法の理解に努め、研究計画書を作成することができる。研究課題は自らの疑問を元に先行文献を十分に確認し検討したものであり、看護学の発展に寄与する内容である。そして研究計画書は論理的で、研究目的と研究方法には一貫性がある。	2					●			◎	○	○	◎	◎			

大学院研究科のディプロマポリシー					専攻のディプロマポリシー												
1. 修士課程健康科学研究科では、所定の年限で在学し、研究指導を受け、所定の単位数を修得し、かつ本研究科が行う修士論文の審査及び試験に合格した者に修士の学位を授与する。 2. 修士課程修了にあつては、専攻のディプロマポリシーに到達していることを目安とする。					1. 健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している。 2. 社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を総合して、独自の新しい視点を提起できる。 3. 研究領域に関する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関する知識に関心を持っている。 4. 人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている。 5. 自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる。												
専攻のカリキュラムポリシー																	
<p>学問領域の構成</p> <p>健康増進に係る医療および健康科学分野の基礎的知識を涵養し、健康寿命の延伸に貢献するために必要な専門的知識や技能および態度を修得できるように学問領域を設定している。人の健康を阻害する要因である障害と生体機能の維持・回復・増進の支援する方策についての知識・技術を集積する「リハビリテーション学領域」、人の生涯にわたっての健康支援や健康を維持・増進するためのケアについての知識・技術を集積する「看護学領域」および両領域に共通する医学および健康科学に関連した領域である「専門基礎領域」から構成されている。</p> <p>科目編成</p> <p>専門とする研究領域とそれに関連する多様な科目はもちろ、他の研究領域や専門基礎領域の科目等を幅広く履修して、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させることを目的としており、「基礎科目」「専門科目」および「課題研究科目」の3つの科目群で編成される。</p> <p>1. 基礎科目(必修科目)</p> <p>本研究科の総論・導入として基礎的な科目群である健康生活を支援するために必要な基本的知識や健康決定要因など健康科学に関する知識について、「心身機能・身体構造」と「病態」について人の生活行動に深く関係する「神経系」を中心に学修する「健康科学特論Ⅰ」および「障害者」「高齢者」「家族」「健康増進」の視点から再構成し、「健康長寿」を追究するための基礎的知識を習得する「健康科学特論Ⅱ」を配置している。</p> <p>2. 専門科目</p> <p>(1) リハビリテーション学領域</p> <p>健康長寿社会に向けて運動や行動など身体活動を中心としたリハビリテーションの基礎となる知識や技術について「障害回復支援理学療法論」および「病態運動学論」から修得する。さらに研究領域に属する分野の最先端知識と研究方法を習得し、新たな研究課題を探索するため運動機能解析学特論「生体機能学特論」「リハビリテーション神経科学特論」「身体運動制御学特論」を配置している。</p> <p>(2) 看護学領域</p> <p>看護学の基礎として「看護理論」「看護倫理論」などを配置し、看護の本質を探究し看護実践への科学的アプローチについて「実践看護基礎学特論」「実践看護技術学特論」で探求する。また、医療の場が病院から在宅に移行していることに伴い、高い専門性と倫理観を背景とした在宅看護の質向上にむけた「在宅・家族看護学特論」などを配置している。</p> <p>(3) 専門基礎領域</p> <p>リハビリテーション学領域と看護学領域の両領域に共通し、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させ、専門分野をより深く学修することを支援する科目を配置している。</p> <p>3. 課題研究科目</p> <p>「健康科学特別研究」を必修としている。ここでは、研究計画立案、調査あるいは実験計画の作成と実行、研究結果の分析と考察、そして論文執筆を通じて研究指導教員との議論を含む指導を受けながら、修士論文の完成に至る。その過程において、全ての研究科所属教員が参加する修士論文研究計画発表会にて、研究計画あるいは研究結果の報告や発表を通じて、多角的な視点から指導を受ける。</p>					<p>健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している</p> <p>社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を総合して、独自の新しい視点を提起できる</p> <p>研究領域に関する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関する知識に関心を持っている</p> <p>人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている</p> <p>自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる</p>												
科目区分	科目コード	科目名	授業科目の概要	到達目標	単位数		開講時期(●)										
					必修	選択	自由	春	秋	春	秋						
課題研究科目	5141	健康科学特別研究Ⅰ	看護の質を保証するために看護活動の改善が必要とされる看護の対象や活動の場の特徴に応じた看護活動について考察し、自らの研究課題を明確にする。研究課題に関連する分野の学問的体系を理解し、実践的な研究計画を立案し、最新の知見を踏まえてデータを分析し、修士論文を作成して公表する過程を修得する。さらに、看護研究に必要な倫理的方策を修得する。	1. 看護学上あるいは臨床上の課題を見出し、自らの研究テーマに絞り込むことができる。 2. 研究課題に関連する分野の学問的成果を体系的に整理し説明できる。 3. 研究課題に関連する分野の先行研究論文を吟味し、評価できる。 4. 研究課題を追究するのにふさわしい研究デザインを選択できる。 5. 研究計画書を具体的にかつ正確に作成できる。	2					●			◎	○	○	◎	◎
	5141	健康科学特別研究Ⅰ	人は、日常生活において、立つ、座る、歩く、などの各動作を繰り返し行っている。健康長寿の維持、健康寿命の延伸のためには、これらの動作を行うための筋骨格系運動機能の増進・維持・回復が必要であり、欠かすことが出来ない。そのため、運動障がい成立機序や運動障がい回復のためのリハビリテーション技術に係る課題の研究指導を行う。実際の研究活動を通して、運動機能の構造の理解と生体作用の専門的知識や技能を関連する新たな知識を追求する。関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論、そして修士論文の作成という研究を展開する。	1. 関連する先行研究をまとめることができる。 2. 適切な研究目的が設定できる。 3. 目的に合った研究方法を選択するための予備的な実験を実施できる。	2					●			◎	○	○	◎	◎
	5141	健康科学特別研究Ⅰ	神経系は運動、記憶、学習、判断、創造性など多くの人間としての高次機能を発現する。さらに神経系は筋骨格系や内臓系との相互作用から、個体レベルの健康に関わる。このような視点から、病態モデル動物の活用およびヒトを対象とした研究を推進し、神経系に着目した健康科学に資する研究を進める。特に、先行研究の収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論を経て修士論文の作成へと研究を展開する。	1. 研究テーマ候補を選択し、関連する先行研究を収集できる。 2. 適切な研究目的の設定と方法の選択ができる。 3. 研究を実施できる。 4. 結果の吟味と考察できる。 5. 修士論文を作成できる。研究成果を発表し、討論できる。	2					●			◎	○	○	◎	◎
	5141	健康科学特別研究Ⅰ	運動障害を改善することは理学療法の重要な目的の一つである。ほとんどの場合、運動障害の背景には姿勢制御障害がある。つまり、運動障害を改善するには、その背景にある姿勢制御障害を改善する必要がある。各種の身体運動計測機器を用いてヒトの姿勢制御を分析することで、姿勢制御障害成立の機序やその回復のためのリハビリテーション技術に	1. 関連する先行研究を収集できる。 2. 適切な研究目的の設定ができる。 3. 目的に合った研究方法を選択するための予備的な実験を実施できる。	2					●			◎	○	○	◎	◎
	5141	健康科学特別研究Ⅱ	看護の質を保証するために看護活動の改善が必要とされる看護の対象や活動の場の特徴に応じた看護活動について考察し、自らの研究課題を明確にする。研究課題に関連する分野の学問的体系を理解し、実践的な研究計画を立案し、最新の知見を踏まえてデータを分析し、修士論文を作成して公表する過程を修得する。さらに、看護研究に必要な倫理的方策を修得する。	1. 看護学上あるいは臨床上の課題を見出し、自らの研究テーマに絞り込むことができる。 2. 研究課題に関連する分野の学問的成果を体系的に整理し説明できる。 3. 研究課題に関連する分野の先行研究論文を吟味し、評価できる。 4. 研究課題を追究するのにふさわしい研究デザインを選択できる。 5. 研究計画書を具体的にかつ正確に作成できる。	4					●			◎	○	○	◎	◎



大学院研究科のディプロマポリシー					専攻のディプロマポリシー												
1. 修士課程健康科学研究科では、所定の年限で在学し、研究指導を受け、所定の単位数を修得し、かつ本研究科が行う修士論文の審査及び試験に合格した者に修士の学位を授与する。 2. 修士課程修了にあつては、専攻のディプロマポリシーに到達していることを目安とする。					1. 健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している。 2. 社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を総合して、独自の新しい視点を提起できる。 3. 研究領域に関する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関する知識に関心を持っている。 4. 人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている。 5. 自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる。												
<b>専攻のカリキュラムポリシー</b>  <b>学問領域の構成</b> 健康増進に係る医療および健康科学分野の基礎的知識を涵養して、健康寿命の延伸に貢献するために必要な専門的知識や技能および態度を修得できるように学問領域を設定している。人の健康を阻害する要因である障害と生体機能の維持・回復・増進の支援する方策についての知識・技術を集積する「リハビリテーション学領域」、人の生涯にわたっての健康支援や健康を維持・増進するためのケアについての知識・技術を集積する「看護学領域」および両領域に共通する医学および健康科学に関連した領域である「専門基礎領域」から構成されている。																	
<b>科目編成</b> 専門とする研究領域とそれに関連する多様な科目はもちろんで、他の研究領域や専門基礎領域の科目等を幅広く履修して、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させることを目的としており、「基礎科目」「専門科目」および「課題研究科目」の3つの科目群で編成される。 1. 基礎科目(必修科目) 本研究科の総論・導入として基礎的な科目群である健康生活を支援するために必要な基本的知識や健康決定要因など健康科学に関する知識について、「心身機能・身体構造」と「病態」について人の生活行動に深い「運動系」「神経系」を中心に学修する「健康科学特論Ⅰ」および「障害者」「高齢者」「家族」「健康増進」の視点から再構成し、「健康長寿」を追究するための基礎的知識を習得する「健康科学特論Ⅱ」を配置している。 2. 専門科目 (1) リハビリテーション学領域 健康長寿社会に向けて運動や行動など身体活動を中心としたリハビリテーションの基礎となる知識や技術について「障害回復支援理学療法論」および「病態運動学論」から修得する。さらに研究領域に関する分野の最先端知識と研究手法を獲得し、新たな研究課題を探索するための運動機能解析学特論「生体機能学特論」「リハビリテーション神経科学特論」「身体運動制御学特論」を配置している。 (2) 看護学領域 看護学の基礎として「看護理論」「看護倫理論」などを配置し、看護の本質を探究し看護実践への科学的アプローチについて「実践看護基礎学特論」「実践看護技術学特論」で探求する。また、医療の場が病院から在宅に移行していることに伴い、高い専門性と倫理観を背景とした在宅看護の質向上にむけた「在宅・家族看護学特論」などを配置している。 (3) 専門基礎領域 リハビリテーション学領域と看護学領域の両領域に共通し、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させ、専門分野をより深く学修することを支援する科目を配置している。 3. 課題研究科目 「健康科学特別研究」を必修としている。ここでは、研究計画立案、調査あるいは実験計画の作成と実行、研究結果の分析と考察、そして論文執筆を通じて研究指導教員との議論を含む指導を受けながら、修士論文の完成に至る。その過程において、全ての研究科所属教員が参加する修士論文研究計画発表会にて、研究計画あるいは研究結果の報告を行い、多角的な視点から指導を受ける。																	
科目区分	科目コード	科目名	授業科目の概要	到達目標	単位数		開講時期(●)										
					必修	選択	自由	春	秋	春	秋						
課題研究科目	5142	健康科学特別研究Ⅱ	看護学における多様な研究方法の特徴について理解し、看護の本質と目的、対象論、実践への方法論の見地から、院生自身のもつ問題意識を明確に出来る。院生自身のもつ問題意識に關連した文献の検討が、多様な視点から出来る。看護学における多様な研究方法の特徴について理解出来る。院生自身のもつ問題意識に關連した文献の検討が、多様な視点から出来る。看護学における多様な研究方法の特徴について理解出来る。院生自身のもつ問題意識に關連した文献の検討が、多様な視点から出来る。	1. 看護学研究における多様な研究方法の特徴について理解出来る。 2. 看護の本質と目的、対象論、実践への方法論の見地から、院生自身のもつ問題意識を明確に出来る。 3. 院生自身のもつ問題意識に關連した文献の検討が、多様な視点から出来る。 4. 看護学研究における多様な研究方法の特徴について理解出来る。 5. 院生自身のもつ問題意識に關連した文献の検討が、多様な視点から出来る。 6. 研究課題に關連する研究の意義を念頭に研究目的が設定出来る。 7. 研究計画を立てる。 (1) 研究デザインを構築できる (2) 研究目的に適合した対象の設定出来る (3) 研究手法を決定し、構築出来る 8. 研究計画に沿って、研究倫理審査資料の作成が出来る。	4					●			◎	○	○	◎	◎
	5142	健康科学特別研究Ⅱ	家族人数の減少と急速な少子高齢化、病院から在宅医療への移行の促進に伴い、高い専門性と倫理観を背景とした在宅看護の質向上が期待されている。健康科学特別研究Ⅰ～Ⅲでは、在宅看護学の学問を用いて、在宅看護の質向上と対象者のQOL向上につながる研究課題を見出し、研究計画に基づき、研究方法を用いて論文としてまとめる学術的な取り組みについて学修する。	自己の研究課題に関わる在宅看護学分野における最新の知見と研究方法の理解に努め、作成された研究計画書をもとに研究を進めることができる。研究課題は自らの疑問をもとに選考文献を十分に確認し、検討したものであり、看護学の発展に寄与する内容である。そして研究計画書は論理的で、研究目的と研究方法には一貫性があり、研究計画書に基づき研究を進めることができる。	4					●			◎	○	○	◎	◎
	5142	健康科学特別研究Ⅱ	人は、日常生活において、立つ、座る、歩くなどの各動作を繰り返し行っている。健康長寿の維持、健康寿命の延伸のためには、これらの動作を行うための筋骨格系運動機能の増進・維持・回復が必要であり、欠かすことが出来ない。そのため、3次元運動解析技術を用いて各種動作を生体力学的に分析し、運動障がい回復のためのリハビリテーション技術に係る課題の研究指導を行う。実際の研究活動を通して、運動機能の回復・維持・増進のための方策の計画・立案についての専門的知識や技能を関連する新たな知識を追求する。関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論、そして修士論文の作成という研究を展開する。	1. 関連する先行研究をまとめることができる。 2. 研究目的を達成するために、適切な研究方法を設定できる。 3. 適切な方法を用いて研究が実施できる。						●			◎	○	○	◎	◎
	5142	健康科学特別研究Ⅱ	神経系は運動、記憶、学習、判断、創造性など多くの人間としての高次機能を発現する。さらに神経系は筋骨格系や内臓系との相互作用から、個体レベルの健康に関わる。このような視点から、病態モデル動物の活用およびヒトを対象とした研究を推進し、神経系に着目した健康科学に資する研究を進める。特に、先行研究の収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論を経て修士論文の作成へと研究を展開する。	1. 研究テーマ候補を選択し、関連する先行研究を収集できる。 2. 適切な研究目的の設定と方法の選択ができる。 3. 研究を実施できる。 4. 結果の吟味と考察できる。 5. 修士論文を作成できる。 6. 研究成果を発表し、討論できる。						●			◎	○	○	◎	◎

大学院研究科のディプロマポリシー				専攻のディプロマポリシー																												
1. 修士課程健康科学研究科では、所定の年限で在学し、研究指導を受け、所定の単位数を修得し、かつ本研究科が行う修士論文の審査及び試験に合格した者に修士の学位を授与する。 2. 修士課程修了にあつては、専攻のディプロマポリシーに到達していることを目安とする。				1. 健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している。 2. 社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を総合して、独自の新しい視点を提起できる。 3. 研究領域に関する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関する知識に関心を持っている。 4. 人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている。 5. 自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる。																												
専攻のカリキュラムポリシー																																
<p>学問領域の構成</p> <p>健康増進に係る医療および健康科学分野の基礎的知識を涵養し、健康寿命の延伸に貢献するために必要な専門的知識や技能および態度を修得できるように学問領域を設定している。人の健康を阻害する要因である障害と生体機能の維持・回復・増進の支援する方策についての知識・技術を集積する「リハビリテーション学領域」、人の生涯にわたっての健康支援や健康を維持・増進するためのケアについての知識・技術を集積する「看護学領域」および両領域に共通する医学および健康科学に関連した領域である「専門基礎領域」から構成されている。</p> <p>科目編成</p> <p>専門とする研究領域とそれに関連する多様な科目はもちろんだが、他の研究領域や専門基礎領域の科目等を幅広く履修して、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させることを目的としており、「基礎科目」「専門科目」および「課題研究科目」の3つの科目群で編成される。</p> <p>1. 基礎科目(必修科目)</p> <p>本研究科の総論・導入として基礎的な科目群である健康生活を支援するために必要な基本的知識や健康決定要因など健康科学に関する知識について、「心身機能・身体構造」と「病態」について人の生活行動に深く関係する「運動系」「神経系」を中心に学修する「健康科学特論Ⅰ」および「障害者」「高齢者」「家族」「健康増進」の視点から再構成し、「健康長寿」を追究するための基礎的知識を習得する「健康科学特論Ⅱ」を配置している。</p> <p>2. 専門科目</p> <p>(1) リハビリテーション学領域</p> <p>健康長寿社会に向けて運動や行動など身体活動を中心としたリハビリテーションの基礎となる知識や技術について「障害回復支援理学療法論」および「病態運動学論」から研究する。さらに研究領域に関する分野の最先端知識と研究手法を習得し、新たな研究課題を探索するための運動機能解析学特論「生体機能学特論」「リハビリテーション神経科学特論」「身体運動制御学特論」を配置している。</p> <p>(2) 看護学領域</p> <p>看護学の基礎として「看護理論」「看護倫理論」などを配置し、看護の本質を探究し看護実践への科学的アプローチについて「実践看護基礎学特論」「実践看護技術学特論」で探求する。また、医療の場が病院から在宅に移行しているに伴い、高い専門性と倫理観を背景とした在宅看護の質向上にむけた「在宅家族看護学特論」などを配置している。</p> <p>(3) 専門基礎領域</p> <p>リハビリテーション学領域と看護学領域の両領域に共通し、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させ、専門分野をより深く学修することを支援する科目を配置している。</p> <p>3. 課題研究科目</p> <p>「健康科学特別研究」を必修としている。ここでは、研究計画立案、調査あるいは実験計画の作成と実行、研究結果の分析と考察、そして論文執筆を通じて研究指導教員との議論を含む指導を受けながら、修士論文の完成に至る。その過程において、全ての研究科所属教員が参加する修士論文研究計画発表会にて、研究計画あるいは研究結果の発表を行い、多角的な視点から指導を受ける。</p>				健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している																												
				社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を総合して、独自の新しい視点を提起できる		研究領域に関する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関する知識に関心を持っている		人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている		自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる																						
科目区分	科目コード	科目名	授業科目の概要	到達目標	単位数		開講時期(●)																									
					必修	選択	自由	1年	2年	春							秋	春	秋													
	5142	健康科学特別研究Ⅱ	運動障害を改善することは理学療法の重要な目的の一つである。ほとんどの場合、運動障害の背景には姿勢制御障害がある。つまり、運動障害を改善するには、その背景にある姿勢制御障害を改善する必要がある。各種の身体運動計測機器を用いてヒトの姿勢制御を分析することで、姿勢制御障害成立の機序やその回復のためのリハビリテーション技術に	1. 関連する先行研究をまとめることができる。 2. 研究目的を達成するために、適切な研究方法を設定できる。 3. 適切な方法を用いて研究が実施できる。										●	◎	○	◎	◎														
	5143	健康科学特別研究Ⅲ	看護の質を保証するために看護活動の改善が必要とされる看護の対象や活動の場の特徴に応じた看護活動について考察し、自らの研究課題を明確にする。研究課題に関連する分野の学問的体系を理解し、実践的な研究計画を立案し、最新の知見を踏まえてデータを分析し、修士論文を作成して公表する過程を修得する。さらに、看護研究に必要な倫理的方策を修得する。	1. 看護学上あるいは臨床上の課題を見出し、自らの研究テーマに絞り込むことができる。 2. 研究課題に関連する分野の学問的成果を体系的に整理し説明できる。(修士論文検討会) 3. 研究課題に関連する分野の先行研究論文を吟味し、評価できる。 4. 研究課題を追究するのにふさわしい研究デザインを選択できる。 5. 研究計画書を具体的かつ正確に作成できる。(修士論文検討会) 6. 研究のすべての段階において、倫理的に妥当で適切な行動をとることができる。 7. 研究計画は大学の倫理委員会の承認を得てから実施する。																	●	◎	○	◎	◎							
課題研究科目	5143	健康科学特別研究Ⅲ	健康科学特別研究ⅠおよびⅡに引き続き、生体は、種々の刺激(ストレス)を受容し、それに応答・適応する。さらに、発育・発達・成熟・老化や様々な疾病・疾患により生体の機能は大きく変容する。本特別研究では、骨格筋を主たるターゲットとし、骨格筋機能に関連する様々な生体機能とそれらに影響を与える因子を探索すると共に、生活の質(Quality of Life)や健康を維持増進していくために必要な生体応答に関する総合的な課題についての研究指導を行う。実際の研究活動を通して、生体機能の回復・維持・増進のための方策の計画・立案についての専門的知識や技能を関連する新たな知識を追求する。関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法を選択し、関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法を選択し、適切な統計処理を行うことができる。	1. 研究テーマ候補を選択し、関連する先行研究を収集できる。 2. 適切な研究目的の設定と方法の選択ができる。 3. 研究を実施できる。 4. 結果の吟味と考察できる。 5. 修士論文を作成できる。 6. 研究成果を発表し、討論できる。																					●	◎	○	◎	◎			
	5143	健康科学特別研究Ⅲ	人は、日常生活の中で立つ、座る、歩く、などの各動作を繰り返し行っている。健康寿命の維持、健康寿命の延伸のためには、これらの動作を行うための筋骨格系運動機能の増進・維持・回復が必要であり、欠かすことが出来ない。そのため、3次元運動解析技術を用いて各種動作を生体力学的に分析し、運動障害が回復するためのリハビリテーション技術に係る課題の研究指導を行う。実際の研究活動を通して、運動機能の回復・維持・増進のための方策の計画・立案についての専門的知識や技能を関連する新たな知識を追求する。関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論、そして修士論文の作成という研究を遂行する。	1. 関連する先行研究をまとめることができる。 2. 研究結果について整理し、適切な統計処理を行うことができる。 3. 研究の結果を考察し、修士論文をまとめることができる。																									●	◎	○	◎

大学院研究科のディプロマポリシー						専攻のディプロマポリシー															
1. 修士課程健康科学研究科では、所定の年限在学し、研究指導を受け、所定の単位数を修得し、かつ本研究科が行う修士論文の審査及び試験に合格した者に修士の学位を授与する。 2. 修士課程修了にあつては、専攻のディプロマポリシーに到達していることを目安とする。						1. 健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している。 2. 社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を総合して、独創的で新しい視点を提起できる。 3. 研究領域に関する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関する知識に関心を持っている。 4. 人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている。 5. 自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる。															
<b>専攻のカリキュラムポリシー</b>  <b>学問領域の構成</b> 健康増進に係る医療および健康科学分野の基礎的知識を涵養して、健康寿命の延伸に貢献するために必要な専門的知識や技能および態度を修得できるように学問領域を設定している。人の健康を阻害する要因である障害と生体機能の維持・回復・増進の支援する方策についての知識・技術を集積する「リハビリテーション学領域」、人の生涯にわたっての健康支援や健康を維持・増進するためのケアについての知識・技術を集積する「看護学領域」および両領域に共通する医学および健康科学に関連した領域である「専門基礎領域」から構成されている。																					
<b>科目編成</b> 専門とする研究領域とそれに関連する多様な科目はもちろむ、他の研究領域や専門基礎領域の科目等を幅広く履修して、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させることを目的として、「基礎科目」「専門科目」および「課題研究科目」の3つの科目群で編成される。																					
<b>1. 基礎科目(必修科目)</b> 本研究科の総論・導入として基礎的な科目群である健康生活を支援するために必要な基本的知識や健康決定要因など健康科学に関する知識について、「心身機能・身体構造」と「病態」について人の生活行動に深い「運動系」「神経系」を中心に学修する「健康科学特論Ⅰ」および「障害者」「高齢者」「家族」「健康増進」の視点から再構成し、「健康長寿」を追究するための基礎的知識を習得する「健康科学特論Ⅱ」を配置している。																					
<b>2. 専門科目</b> <b>(1) リハビリテーション学領域</b> 健康長寿社会に向けて運動や行動など身体活動を中心としたリハビリテーションの基礎となる知識や技術について「障害回復支援理学療法論」および「病態運動学論」から修得する。さらに研究領域に属する分野の最先端知識と研究手法を習得し、新たな研究課題を探索するため運動機能解析学特論「生体機能学特論」「リハビリテーション神経科学特論」「身体運動制御学特論」を配置している。																					
<b>(2) 看護学領域</b> 看護学の基礎として「看護理論」「看護倫理論」などを配置し、看護の本質を探究し看護実践への科学的アプローチについて「実践看護基礎学特論」「実践看護技術学特論」で探求する。また、医療の場が病院から在宅に移行していることに伴い、高い専門性と倫理観を背景とした在宅看護の質向上にむけた「在宅・家族看護学特論」などを配置している。																					
<b>(3) 専門基礎領域</b> リハビリテーション学領域と看護学領域の両領域に共通し、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させ、専門分野をより深く学修することを支援する科目を配置している。																					
<b>3. 課題研究科目</b> 「健康科学特別研究」を必修としている。ここでは、研究計画立案、調査あるいは実験計画の作成と実行、研究結果の分析と考察、そして論文執筆を通じて研究指導教員との議論を含む指導を受けながら、修士論文の完成に至る。その過程において、全ての研究科所属教員が参加する修士論文研究計画発表会にて、研究計画あるいは研究結果の報告を行い、多角的な視点から指導を受ける。																					
科目区分	科目コード	科目名	授業科目の概要	到達目標	単位数		開講時期(●)														
					必修	選択	自由	1年	2年	春	秋	春	秋								
課題研究科目	5143	健康科学特別研究Ⅲ	立案した研究計画に従って研究を実施して、健康科学特別研究Ⅱで作成した報告書をもとに論文を作成していく。先行研究の検索と研究結果との対比、結果解釈の正当性の確認、等行って可能であれば関連学会で発表する。	1. 修士論文を作成できる。  2. 論文審査を受けて、研究概要を説明することができる。	6							●				◎	○	○	◎	◎	
	5143	健康科学特別研究Ⅲ	初等統計学よりも一歩進んだ標準的な教科書を通読する。	医学論文に出てくる統計手法の概略を理解できるようになり、自身でも利用できるようになる。	6								●				◎	○	○	◎	◎
	5143	健康科学特別研究Ⅲ	健康科学特別研究ⅠとⅡの課程を修了後、得られた研究データの解析方法について討議して検討を行い、研究成果の発表と修士論文の作成方法について学修する。データの解析と意味付けは、総合討論に基づいて行う。	研究成果の発表と修士論文の作成	6									●			◎	○	○	◎	◎
	5143	健康科学特別研究Ⅲ	看護の本質と目的、対象論、実践への方法論の見地から、生自身のもつ問題意識を明確にしたうえで、院生が作成した研究計画に基づき、研究を遂行し、十分な考察を加えて修士論文としてまとめ、成果を発表する。また、その一連の過程において、研究の倫理的重要性を同時に修得する。さらに、研究課題を明らかにするにあたり、倫理的配慮の必要性和研究の適切なプロセスをふむ必要性についても十分修得する。	1. 院生自身の持つ問題意識からの研究目的、研究方法を再検討出来る。 2. 研究倫理審査の結果をふまえ、研究の倫理配慮を再確認出来る。 3. 研究計画に基づき、研究を実施出来る。 4. 研究対象の選択、依頼等の過程を適切に出来る。 5. 研究成果を発表し、適切な質疑応答が出来る	6									●			◎	○	○	◎	◎

大学院研究科のディプロマポリシー				専攻のディプロマポリシー																
1. 修士課程健康科学研究科では、所定の年限で在学し、研究指導を受け、所定の単位数を修得し、かつ本研究科が行う修士論文の審査及び試験に合格した者に修士の学位を授与する。 2. 修士課程修了にあつては、専攻のディプロマポリシーに到達していることを目安とする。				1. 健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している。 2. 社会的な動向に関心をもち、関連する領域の知見を総合して、独自の新しい視点を提起できる。 3. 研究領域に関連する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関連する知識に関心を持っている。 4. 人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている。 5. 自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる。																
専攻のカリキュラムポリシー				健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識を修得している																
<p>学問領域の構成</p> <p>健康増進に係る医療および健康科学分野の基礎的知識を涵養して、健康寿命の延伸に貢献するために必要な専門的知識や技能および態度を修得できるように学問領域を設定している。人の健康を阻害する要因である障害と生体機能の維持・回復・増進の支援する方策についての知識・技術を集積する「リハビリテーション学領域」、人の生涯にわたっての健康支援や健康を維持・増進するためのケアについての知識・技術を集積する「看護学領域」および両領域に共通する医学および健康科学に関連した領域である「専門基礎領域」から構成されている。</p> <p>科目編成</p> <p>専門とする研究領域とそれに関連する多様な科目はもちろむ、他の研究領域や専門基礎領域の科目等を幅広く履修して、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させることを目的としており、「基礎科目」「専門科目」および「課題研究科目」の3つの科目群で編成される。</p> <p>1. 基礎科目(必修科目)</p> <p>本研究科の総論・導入として基礎的な科目群である健康生活を支援するために必要な基本的知識や健康決定要因など健康科学に関する知識について、「心身機能・身体構造」と「病態」について人の生活行動に深く関係する「運動系」「神経系」を中心に学修する「健康科学特論Ⅰ」および「障害者」「高齢者」「家族」「健康増進」の視点から再構成し、「健康長寿」を追究するための基礎的知識を習得する「健康科学特論Ⅱ」を配置している。</p> <p>2. 専門科目</p> <p>(1) リハビリテーション学領域</p> <p>健康長寿社会に向けて運動や行動など身体活動を中心としたリハビリテーションの基礎となる知識や技術について「障害回復支援理学療法論」および「病態運動学論」から修得する。さらに研究領域に関連する分野の最先端知識と研究手法を習得し、新たな研究課題を探索するための運動機能解析学特論「生体機能学特論」「リハビリテーション神経科学特論」「身体運動制御学特論」を配置している。</p> <p>(2) 看護学領域</p> <p>看護学の基礎として「看護理論」「看護倫理論」などを配置し、看護の本質を探究し看護実践への科学的なアプローチについて「実践看護基礎学特論」「実践看護技術学特論」で探求する。また、医療の場が病院から在宅に移行していることに伴い、高い専門性と倫理観を背景とした在宅看護の質向上にむけた「在宅・家族看護学特論」などを配置している。</p> <p>(3) 専門基礎領域</p> <p>リハビリテーション学領域と看護学領域の両領域に共通し、本研究科の特色である多角的な視点から学際的な研究活動を実現させ、専門分野をより深く学修することを支援する科目を配置している。</p> <p>3. 課題研究科目</p> <p>「健康科学特別研究」を必修としている。ここでは、研究計画立案、調査あるいは実験計画の作成と実行、研究結果の分析と考察、そして論文執筆を通じて研究指導教員との議論を含む指導を受けながら、修士論文の完成に至る。その過程において、全ての研究科所属教員が参加する修士論文研究計画発表会にて、研究計画あるいは研究結果の発表を行うことにより、多角的な視点から指導を受ける。</p>				<p>社会的な動向に関心をもち、関連する領域の知見を総合して、独自の新しい視点を提起できる</p> <p>研究領域に関連する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関連する知識に関心を持っている</p> <p>人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につけている</p> <p>自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現できる</p>																
科目区分	科目コード	科目名	授業科目の概要	到達目標	単位数		開講時期(●)													
					必修	選択	自由	春	秋	春	秋									
課題研究科目	5143	健康科学特別研究Ⅲ	家族人数の減少と急速な少子高齢化、病院から在宅医療への移行の促進に伴い、高い専門性と倫理観を背景とした在宅看護の質向上が期待されている。健康科学特別研究Ⅰ～Ⅱでは、在宅看護学の学問を用いて、在宅看護の質向上と対象者のQOL向上につながる研究課題を見出し、研究計画に基づき、研究手法を用いて論文としてまとめる学術的な取り組みについて学修する。	自己の研究課題に関わる在宅看護学分野における最新の知見と研究方法の理解に努め、研究計画書にそって、データ収集分析を行うことができる。そして、得られた結果について、一貫性のある論文を作成し、発表することができる。研究の一連の流れを経験できる。看護学の発展に寄与する研究である。	6						●				◎		○		○	◎
	5143	健康科学特別研究Ⅲ	家族人数の減少と急速な少子高齢化、病院から在宅医療への移行の促進に伴い、高い専門性と倫理観を背景とした人体の構造と機能の理解が期待されている。健康科学特別研究ⅠからⅡでは、小児の発達とそれに伴う脳の高次脳に関する研究課題を見出し、研究計画に基づき、研究手法を用いて論文としてまとめる学術的な取り組みにつちえ学修する。	1. 関連する先行研究をまとめることができる。 2. 研究結果について整理し、適切な統計処理を行うことができる。 3. 研究の結果を考察し、修士論文をまとめることができる。	6						●				◎		○		○	◎
	5143	健康科学特別研究Ⅲ	看護の質を保証するために看護活動の改善が必要とされる看護の対象や活動の場の特徴に応じた看護活動について考察し、自らの研究課題を明確にする。研究課題に関連する分野の学問的体系的な理解し、実践的な研究計画を立案し、最新の知見を踏まえてデータを分析し、修士論文を作成して公表する過程を修得する。さらに、看護研究に必要な倫理的方略を修得する。	1. 看護学上あるいは臨床上の課題を見出し、自らの研究テーマに絞り込むことができる。 2. 研究課題に関連する分野の学問的成果を体系的に整理し説明できる。(修士論文検討会) 3. 研究課題に関連する分野の先行研究論文を吟味し、評価できる。 4. 研究課題を追究するのにふさわしい研究デザインを選択できる。 5. 研究計画書をもとに具体的なかつ正確に作成できる。(修士論文検討会) 6. 研究のすべての段階において、倫理的に妥当な行動をとることができる。 7. 研究計画は大学の倫理委員会の承認を得てから実施する。	6							●			◎		○		○	◎
	5143	健康科学特別研究Ⅲ	神経系は運動、記憶、学習、判断、創造性など多くの人間としての高次機能を発現する。さらに神経系は筋骨格系や内臓系との相互作用から、個体レベルの健康に関わる。このような視点から、病態モデル動物の活用およびヒトを対象とした研究を推進し、神経系に着目した健康科学に資する研究を進める。特に、先行研究の収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論を経て修士論文の作成へと研究を展開する。	1. 研究テーマ候補を選択し、関連する先行研究を収集できる。 2. 適切な研究目的の設定と方法の選択ができる。 3. 研究を実施できる。 4. 結果の吟味と考察できる。 5. 修士論文を作成できる。 6. 研究成果を発表し、討論できる。	6							●			◎		○		○	◎
	5143	健康科学特別研究Ⅲ	運動障害を改善することは理学療法で重要な目的の一つである。ほとんどの場合、運動障害の背景には姿勢制御障害がある。つまり、運動障害を改善するには、その背景にある姿勢制御障害を改善する必要がある。各種の身体運動計測器を用いてヒトの姿勢制御を分析することで、姿勢制御障害成立の機序やその回復のためのリハビリテーション技術に	1. 関連する先行研究をまとめることができる。 2. 研究結果について整理し、適切な統計処理を行うことができる。 3. 研究の結果を考察し、修士論文をまとめることができる。	6							●			◎		○		○	◎